只見短歌会　十二月詠草

大塚栄一　指導

受験ゆゑ孫子ら来ぬと電話受けし夫は注連縄買ふを急がず　古川　英子

秋茱萸の味見をしつつ歩きをり鈴生りの実の日ごとに甘し　小倉キミ子

言ひ訳の手紙漸く書き添へて雪しまく夜に小包作る　馬場　八智

老い父の長き願ひの石南花を咲かせし息子は施設に持ち来　新国由紀子

新雪の降り積む庭に綿帽子を冠りし如く花木が並ぶ　目黒　富子

幾度の台風あれど大過なく年越す夕餉の米研ぎ上げる　渡部ゆき子

知恵遅き子がテレビの音高くして厨のわれに民謡聞かす　五十嵐夏美

鉢植ゑの深紅冴えたるシクラメン見る度ごとに心和むも　関谷登美子

鼻歌をうたひ器を洗ひゐる五歳の孫に夫と顔合はす　渡部ヨリ子

吹雪くなか花の仕入れの孫送れば帰り来るまで心安まらず　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　一月例会

目黒十一　指導

花型の紙二つ貼る障子かな　一穂

大家族十六人のお正月　洋子

茶の花の枝引き寄せて聞香す　礼

めずらしくバス停に立つ小雪かな　信

湯豆腐や少し早めに灯す居間　修一

粕汁の湯気に酔いたる夕かな　恒夫

初雪や戯る子らに憂いなし　又壱歩

山肌を白く化粧し冬来る　雪折れの砌に鳥の飛び立ちぬ

松の内「火の用心」の訪問者　雪折れの音する夜の裏の森

北風に顔背向けつつ回覧板

初夢の筋の通らぬあたりまで

子の生まる久しき村や女正月

初夢や五億長者の夢醒めな　吉児

初手水瞬く星を掬へけり　邦男

白虎隊の舞を納めて十二月　邦夫

雪空や広報無線テスト中　笑羊

賀状書く終わりし夜の深眠り　リウコ

降る雪に負けた年なく百となる　都

振り返す手へ崩れたるぼたん雪

口喧嘩縄のくいこむ葱を買う

八十の女が二人冬夕焼け

掌にのせて装丁の良き日記帳

ふんわりと小雪ただよう冬の晴

晴天や泣く子遠目に障子貼る